

様式 C-7-1

平成24年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）実績報告書（研究実績報告書）

1. 機関番号	3 2 6 0 4	2. 研究機関名	大妻女子大学																									
3. 研究種目名	若手研究(B)																											
4. 補助事業期間	平成22年度～平成25年度																											
5. 課題番号	2 2 7 3 0 4 7 4																											
6. 研究課題	道徳性知覚による集団間葛藤解決過程の解明																											
7. 研究代表者	<table border="1"> <tr> <th>研究者番号</th> <th>研究代表者名</th> <th>所属部局名</th> <th>職名</th> </tr> <tr> <td>2 0 4 0 0 2 0 2</td> <td>クマガイ トモヒロ ----- 熊谷 智博</td> <td>文学部</td> <td>助教</td> </tr> </table>				研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名	2 0 4 0 0 2 0 2	クマガイ トモヒロ ----- 熊谷 智博	文学部	助教																
研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名																									
2 0 4 0 0 2 0 2	クマガイ トモヒロ ----- 熊谷 智博	文学部	助教																									
8. 研究分担者	<table border="1"> <thead> <tr> <th>研究者番号</th> <th>研究分担者名</th> <th>所属研究機関名・部局名</th> <th>職名</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </tbody> </table>				研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名																				
研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名																									
9. 研究実績の概要	<p>集団間葛藤解決と道徳性知覚の関係を検証するために、本年度は被害者の道徳性知覚の効果を調査した。具体的には287名の大学生を対象に、日中関係に関する質問紙調査を行った。調査項目は「知覚された中国人の道徳性」「知覚された中国人の有能さ」「集団的罪悪感」「日本政府による謝罪の支持」「日本政府による賠償政策の支持」であった。心理過程としては被害者の道徳性を強く知覚していればいるほど、加害者は自集団の加害行為をより非道徳的と考えるので、それだけ集団的罪悪感が強くなる、そして集団的罪悪感が強くなればなるほど、被害者集団に対して、政府による謝罪と賠償政策への支持的態度が強まると予測した。一方知覚された有能さは集団的罪悪感に影響を与えないで、政府による謝罪と賠償への態度に影響を与えるないと予測した。結果は予測通り、知覚された中国人の道徳性は政府による謝罪支持、政府による補償支持の両方を直接強めていたが、同時に集団的罪悪感を介しても効果を与えていた。その一方で、知覚された中国人の有能さは全く効果を持っていなかった。この結果より、被害者集団に対する単なる肯定的な知覚そのものが集団間葛藤解決に効果的な謝罪や賠償への支持を促進するのでは無く、知覚された特性の中でも道徳性が特に重要な役割を果たしていることが明らかになった。</p> <p>本年度は更に、本研究の応用可能性を探るために、JICAの協力を得て実際の紛争地帯であるボスニア・ヘルツェゴビナのモスタル市にあるMostar Gymnasiumでの取り組みについて調査を行った。特にコンピュータ科目的授業を利用した民族融和の取り組みについて、教材、手続、課題などについてインタビューを行った。今後はJICAと協力して、民族融和プログラムの効果検証に関する調査を行い、その中で外集団に対する道徳性知覚の効果の検証を進める予定である。</p>																											